即位（弘文天皇）されたから、心ある廷臣間に不平不満がみなぎったことは“紀”の記事 から窺える。

大津京側は、これら不平分子が最も人気のある大海人皇子を担ぎ出し、造反されては困るのである。吉野山中に隠棲して仏門の入道修業に明け暮れ、ひたすら恭順の意を示された大海人皇子を討たんと、戦備を整え始めた。

このまま推移すれば、吉野方は座して死を待つのみであった。遂に翌年(672) 6月24日、吉野を脱し、夜を徹して宇陀～伊賀～伊勢を経て美濃不破に進み、野上行宮（のがみあんぐう）を本陣とさる。以上が名高い壬申の大乱の発端である。

乱の経過は日本書紀に詳述されて余す所がないが、原因が不明確の為。史家の浅薄な見解が伝えられてきた。その説は書紀等の片言隻句（へんげんせっく）を捉え、あたかも全ての如く解した、兄弟喧嘩や額田王を巡る恋の鞘当てなどでは決してない筈である。壬申の乱は、皇位継承の尊厳を汚したことに対する義憤、そして大海人皇子を亡き者とし、あわよくば豪族支配を再び…と謀った蘇我残党を払拭する、聖戦であったと考えるべきである。

持統天皇。御名鵜野讃良（うのの さらら）皇女。御父天智帝と大化の改新の功労者蘇我倉山田石川麻呂（そがのくらやまだのいしかわ ま ろ）の女越智姫（おちのいらつめ）と間に生まれられた。天武天皇の皇后として常に夫を助け、壬申の乱にも行動を共にされた。夫天武帝崩御(686) 後、皇后称制。朱鳥８年(694) 藤原京に遷都。王権は確立し、文芸また隆盛を極めた。

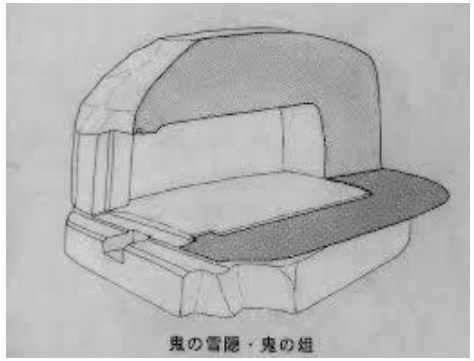
【鬼の俎（まないた）・鬼の雪隠（せっちん）】　　明日香村平田

欽明陵の南側に沿う小道を東に取って行くと、道の両側に二つの加工された巨石が横たわっている。もともと古墳の巨大な石槨で、俎と呼ばれる平らな礎石の上に雪隠の石が覆いかぶさり、その中におそらく木棺が安置されていたのであろう。覆蓋（ふくがい）は、いつの日か一段低い側に転落し、仰向けにひっくり返ったのである。

台石の俎は、造り出しを持つ長サ 4.36m巾 3.32m厚サ１m程の長方形の平石で、転落している雪隠がキチンと 接合できる大きさである。

覆蓋の雪隠は、巾 1.53mで長サは奥壁が欠損して正確な計測ができない。

墓の主は他の古墳同様不明で、欽明陵の陪塚か、又、台石の寸度が大化薄葬令（たいかはくそうれい）で定められた唐尺の９尺×５尺に該当するから、大化薄葬令による墳墓とする学者もあるが、この説は共に当たらぬと思われる。


鬼の雪隠・鬼の俎

【高松塚古墳】　　明日香村上平田

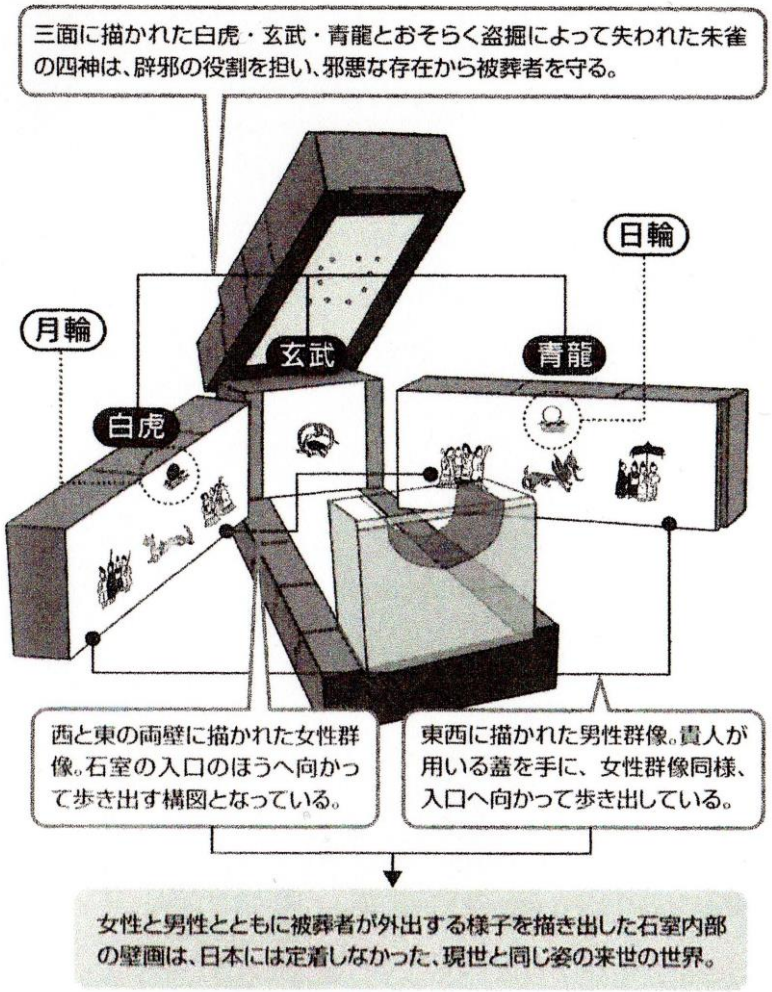
飛鳥大仏，石舞台位しかなかった明日香村に、突然現れたのがこの壁画古墳であった。売らんかなの新聞紙は 珍説を捏造して読者を煽りたて、学者は良心があるのか迷論をはいて世を迷わし、遂に観光商売屋の商品に成り下がってしまった。小役人がこれに輪をかけて公園公害を撒き散らすものだから、歴史的風土も何もあったものではなかった。

橿原考古学研究所の網干善教教授の手により、昭和 47 年(1972)の発掘調査によって、直径２３ｍの二段築成の円墳から、彩色壁画を有する横口式石槨が存在していたことが明らかとなった。鎌倉時代に盗掘されており、副葬品は破損していたが、漆塗木棺が使用されていることがわかり、海獣葡萄鏡、金銅製飾棺金具、銀装大刀金具、琥珀丸玉、ガラス玉、丸玉などが残っていた。

被葬者については明らかではないが、石槨の構造、副葬品などからキトラ古墳やマルコ山古墳などと同様に、７世紀末～８世紀初頭にかけて築造されたと考えられている。

天井に北極五星・四輔四星を中心に二十八宿を模式的に配した星宿図（天文図）があり、南壁は通気孔、北壁は玄武、東壁は日像・青龍を中心に男性像と女性像が左右に配置され、西壁は月像・白虎を中心に男子像と女性像が左右にある。人物画像は蓋（がい）・円翳（えんせん）・蠅払（ようほつ）・鉾（ほこ）・如意（にょい）などの威儀具を手に持っている。（次頁に壁画展開図を示す）

当時の中国や朝鮮半島にみられる画題が使用されていることから、当時の東アジアの葬制を考えるうえで重要である。



【高松塚壁画館】　明日香村上平田

昭和 47 年(1972)に発見された当時のままの壁画を忠実に写し取った『現状模写』と、一部復元して見学しやすくなった『復元模写』、そして石室の大きさや形を体感できる原寸の『石室レプリカ』を展示している。

また、石室から出土した副葬品の太刀飾金具、木棺金具、海獣葡萄鏡などのレプリカもあり、高松塚古墳のすべてを判り易く展示している。壁画館の近くでは、古墳から発見された被葬者の遺骨を納めた慰霊祠がある。

【キトラ（亀虎）古墳】　明日香村阿部山

阿部山集落の入口にある直径 14m 弱の円墳で、高さ約 3.3m の二段築成であり、7 世紀後半の築造と見られている。

この古墳が有名になったのは、昭和 58 年(1983)、網干教授等の調査団が、墳丘上より地中レーダーによって石室の概略を把握した後、南側の盗掘穴よりファイバースコープで探査し、奥壁に玄武の壁画を発見したからである。発掘せずして石室内部を探査できた最初の古墳である。

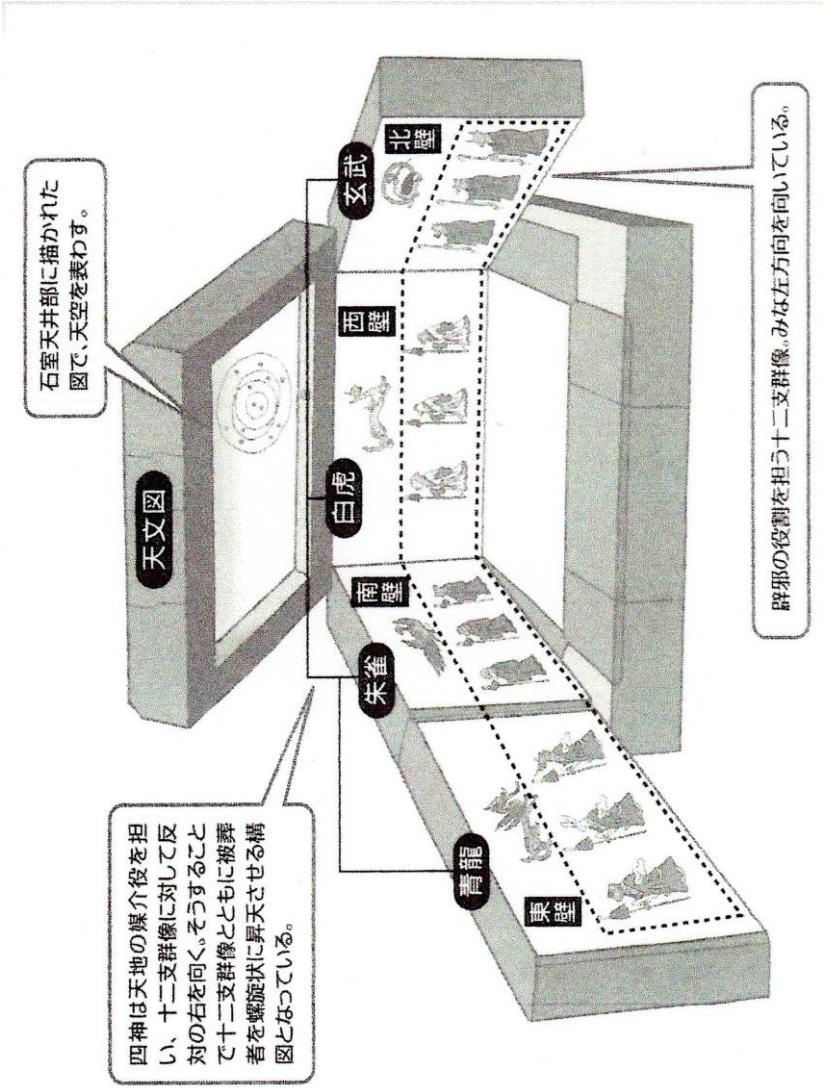
その後の調査により、排水施設の存在や版築とよばれる古代の土木工法によって墳丘が築かれていたことが明らかにされた。埋葬施設は凝灰岩の切石を使用した石槨で、天井石の内側は、マルコ山古墳と同様に屋根形に掘り込まれている。石槨の壁面には朱雀を含む四神図や、十二支を表したと考えられる獣面人身像、日像・月像などを配した本格的な天文図が描かれていたことが、明らかにされた。これらの画題は、中国や朝鮮半島の壁画古墳にもみられることから、大陸における文化の影響を多分に受けていることを感じさせる。

平成 15 年(2003)より石室内調査を開始し、壁画は、そのままにしておいてはやがて崩れてしまう極端なもろさであることがわかり、壁画を守るため、日本で初めての壁画の本格的な取り外しをおこなった。取り外した壁画は細心の注意をはらって修理、強化処理をおこない保存管理し、古墳そのものは石室と同じ石材でふさぎ、埋め戻している。

名前の由来は、中を覗くと亀と虎の壁画が見えたため「亀虎古墳」と呼ばれたという説、古墳の南側の地名「小字北浦」がなまって「キトラ」になったという説、またキトラ古墳が明日香村阿部山集落の北西方向にあるため四神のうち北をつかさどる亀（玄武）と西をつかさどる虎（白虎）から「亀虎」と呼ばれていたという説などある。

古墳の主は天武天皇の皇子である高市皇子、高官であった百済王昌成、古墳周辺一帯が「阿部山」という地名であることから右大臣の阿部御主人（あべのみうし）など、いろいろな人物が想像されている。金や銀を使った副葬品や豪華な装飾をほどこしたと推測できる木棺などから、かなり身分の高い人のお墓であったことがわかる。

次頁の壁画展開図は、天井に天文図と折り上げ部分に日像・月像、北壁は玄武と丑像・子像・亥像、南壁は朱雀と午像、東壁は青龍と寅像、西壁は白虎と戌像の配置図になる。高松塚に描かれていた男女人物像はなく、獣頭人身の十二支像があったのが異なる。



【キトラ古墳壁画体験館・四神の館】　明日香村阿部山

国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区内にある体感型施設。1階の「キトラ古墳壁画保存管理施設」は、実物の壁画や出土遺物を保存管理する施設で、実物の壁画は四半期毎に期間限定で公開している。地下1階の展示室は、キトラ古墳やキトラ古墳壁画を分かりやすく、楽しく学べる施設になっている。

また、別館の体験学習施設では、毎週土日祝日に「勾玉づくり」や、鳥の鳴くような音が出る「バードコールづくり」など、飛鳥の歴史や自然を体験できる様々なプログラムを体験することができる。

キトラ古墳壁画は、石室内部に塗った漆喰の上に繊細な筆づかいで描かれた。本格的な天文図や、四神像の全て、動物の頭と人間の体をもった十二支像などが確認され、学術上、価値の高い文化財である。

作成・改訂　西村　誠
改訂・復刻　末岐敏一
ﾊﾟｿｺﾝ版に変換・再編集　宮下章宏